

共産主義者同盟 (統一委員会)

綱領・規約集

規約

50

戦術・組織テーゼ

28

綱領

8

結成大会宣言

2

結成大会宣言

結成大会宣言

われわれは今日、共産主義者同盟（戦旗派）と共産主義者同盟（全国委員会）を統合し、新たな革命的労働者党として共産主義者同盟（統一委員会）を結成した。

一九五八年に日本共産党を革命的に批判して誕生した第一次共産主義者同盟は、六〇年安保闘争の最先頭に立ってたたかい、日本の階級闘争の中に世界革命、暴力革命、プロレタリア独裁の旗を復権した。そして、第二次共産主義者同盟は、反帝統一戦線と階級的労働運動を推進し、一九七〇年を前後する階級闘争の高揚を日本帝国主義の打倒とプロレタリア社会主義革命に転化するために最先頭でたたかいた。しかし、共産主義者同盟は、その左翼反対派的な性格、「戦略・戦術の党」といふべき弱点から分裂し、それ以降はそ

れぞれの分派として階級闘争の前進のために奮闘してこざるをえなかった。われわれは、共産主義者同盟（統一委員会）の結成をもってこのような一時代に終止符をうち、これまでの革命的伝統と苦闘の経験の一切を継承し、共産主義者同盟を再建していく。

この共産主義者同盟（統一委員会）の結成はまた、共産主義者同盟の再建にとどまらず、日本共産党や革共同にかわって日本階級闘争の前衛に立つ革命的労働者党を建設していくための歴史的なたたかひの新たな開始にほかならない。激動の時代がやがて訪れる予兆がさまざまな形であらわれてきているにもかかわらず、日本における階級闘争がまだ困難な状況にある大きな原因は、このような革命的労働者党の建設が立ち遅れてきたことにある。われわれは、全国の原則的な共産主義者、先進的労働者人民にたいして共産主義者同盟（統一委員会）に結集することを呼びかける。そして、労働者階級と被抑圧人民・被差別人民の解放に向けて、次のようなたたかひとともに決起していくのではないか。

われわれは、労働者階級の自己解放闘争の前衛に立ち、被抑圧人民・被差別大衆のたたかひと結合し、共産主義をすべての搾取され、しいたげられた人民の解放への希望として再生していくためにたたかう。帝国主義的グローバリゼーションのもとで、帝国主義間抗争や資本間競争がさまざまに激しくなり、資本による利潤追求を至上の価値とする弱肉強食の社会へと世界は変貌してきた。そのもとで、どれほど多くの労働者人民が飢えや貧困に苦しみ、不正義の暴力や差別によってしいたげられ、侵略反革命戦争に動員されて殺し合いをさせられていることか。日本においても、ますます多くの労働者が失業・非正規雇用を強いられ、労働条件を切り下げられ、過労死するほどの過酷な労働を強いられ、生存権すら脅かされるような状態に追いやられている。

人が人らしく生きていくことと資本主義はもはやあ入れない。このことをますます多くの労働者階級と被抑圧人民・被差別大衆が実感しはじめている。この

社会を根本的に変革していくことができるのは、これらの最も搾取され、しいたげられてきた労働者人民の自己解放闘争だけである。マルクスが『共産党宣言』をもって共産主義の旗を最初に打ち立てたとき以来、共産主義とはこれらの労働者人民の解放への希望であった。このことを否定した誤った共産主義（スターリン主義）は、もはや世界的に崩壊した。そして、社会民主主義に転落した日本共産党は言うまでもなく、多くの新左翼政党が共産主義から離反してきた。しかしいま、犠牲を強いられ苦悩する労働者人民のなかから再び現社会の根本的な変革への希求が広く生みだされ始めている。この新たな時代を迎えて、われわれは共産主義をこれらの労働者人民の解放への希望として力強く再生させていくためにたたかう。

われわれはまた、労働者人民にさまざまな犠牲を集めつつ、侵略反革命戦争を推進する帝国主義へと歴史的な変貌をとげていこうとする日本帝国主義を打倒し、日本におけるプロレタリア社会主義革命を切りひらいていくためにたたかう。日本帝国主義は、米英帝

によるイラク侵略戦争を支持したことにとどまらず、ついに自衛隊のイラク派兵まで強行した。そして、第二次朝鮮戦争の準備と結びつけて有事法制の確立をはかり、いよいよ憲法改悪に突き進もうとしている。日本帝国主義が全世界の労働者人民の憎むべき敵として登場し、日本の労働者人民が戦争へと強制的に動員され、他国の労働者人民と殺し合いをさせられるというまったく新たな時代が到来する。労働者階級と被抑圧人民・被差別大衆の自己解放闘争は、このような日本帝国主義を打倒し、プロレタリア独裁権力を樹立することによってしか勝利することはできない。それはまた、帝国主義本国に生きる労働者人民の国際的な責務でもある。

そのために、われわれは全国・各地方に新たな階級闘争の構造を建設していくためにたたかう。これほど労働者人民に犠牲が集中し、しいたげられているにもかかわらず、日本の労働者人民は階級闘争に立ちあがっていく水路を断ち切れ、結集すべき階級の団結組織を奪われている。かつて広範な労働者人民を結集さ

越えて、世界的な反グローバリゼーション運動が組織され、数千万人の労働者人民が国際反戦運動に立ちあがってきた。植民地従属国における反帝民族解放闘争、反米レジスタンスが多くの犠牲を払いながら組織されつづけてきた。そして、このようなたたかひのなかから、反帝国際共同闘争が力づくよく組織され、資本主義にかわる新たな社会、帝国主義によって支配された現在の世界にかわる新たな世界への希求が深く、広く生みだされてきている。米帝を中心としたイラク侵略戦争などのあいつぐ侵略戦争の発動は、帝国主義の強さのあらわれではなく、新たな世界的な労働者人民のたたかひへの恐怖心のあらわれなのだ。

いまこそ、プロレタリア国際主義の真紅の旗を高く掲げよう。われわれは、この十数年をかけて世界各地の原則的な共産主義党との連帯関係を結び、アジアにおける国際反帝統一戦線を建設してきた。われわれは、この日本の新左翼政党のどこもが実現できなかった地平に立脚して、国際的な階級闘争の結合をさらに推進し、全世界における帝国主義の打倒とプロレタリア社

せた、社共・総評を中心とする戦後階級闘争の構造は完全に崩壊した。われわれは、これにかわる新たな階級闘争の構造を建設するという壮大なたたかひに向かう。全国・各地方に地域合同労組を中心とした階級の労働運動の拠点を建設し、全人民政治闘争のための広範な政治的統一戦線を編成し、これを反帝国際主義をもって領導する。そして、日本帝国主義の打倒とプロレタリア社会主義革命に向けて献身的にたたかう先進的労働者人民の強固な隊列を登場させていく。それは、日本の階級闘争を基礎から再生し、プロレタリア社会主義革命に向かう布陣を建設していくというまさに歴史的なたたかひなのだ。

日本におけるプロレタリア社会主義革命は、全世界において帝国主義を打倒し、資本主義社会から共産主義社会への移行を実現していくという世界的なたたかひの一部である。帝国主義的グローバリゼーションが吹き荒れるなかで、もはやどのような根本的な社会変革も世界的な規模においてしか実現できないことがますます明らかになってきている。国境を越えて、海を

会主義革命の勝利に向けて、新たなインターを創設していくという歴史的なたたかひに立ち上がる。

われわれは、まさにこのような階級闘争の前衛としての任務を推進していくために、新たな革命的労働者党として、共産主義者同盟(統一委員会)を結成したので。すべての原則的な共産主義者、先進的労働者人民にたいしてあらためて共産主義者同盟(統一委員会)に結集することを呼びかける。労働者階級と被抑圧人民・被差別大衆の解放に向けて、ともに決起しよう。

綱

領

綱領

私たち共産主義者同盟（統一委員会）は、資本家階級（ブルジョアジー）を打倒し、労働者階級（プロレタリアート）の支配を打ち立て、階級支配ならびに階級そのものを廃止し、プロレタリアートの解放—全人民の解放—共産主義社会を建設していくことを、私たちの全活動の基本目的として綱領にかかげる。マルクス主義が明らかにしているように、労働者階級の解放は労働者階級自身の事業である。労働者階級の一部であることを自認する私たちの党は労働者階級の自己解放闘争の先頭に立ち、これを勝利に導くために全力をあげてたたかう。自国帝国主義—日本帝国主義を打倒し、プロレタリア社会主義革命の勝利を通じて日本にプロレタリアートの独裁権力を打ち立てていくことを党は当面の最重要の任務におく。

◆ 第1部

1 資本制社会

私たちが暮らしている社会は資本主義社会である。この社会の大きな特質の一つは、生産物の大半が、生産者が自分で消費するためではなく、市場で販売するための商品として生産されているという点にある。資本主義的生産関係にもとづく商品生産、すなわち資本制商品生産が生産の支配的な様式としてこの社会のすみずみにまで行きわたっている。

資本主義のもとでは、主要な生産手段を私的に所有するブルジョアジーという一握りの階級が、プロレタリアートを雇い入れて財貨を生産している。ここでの生産を規定する目的や動機は剰余価値の生産であり、ブルジョアジーはプロレタリアートの無償の労働によってつくりだされる剰余価値を利潤として自分のものにする。

プロレタリアートは生産手段をまったく持たないために、自分の労働力を商品としてブルジョアジーに売

労働者階級の解放はまた世界的な事業である。日本革命は、共産主義世界革命の一環としてたたかいたいられねばならない。世界革命の実現は国際プロレタリアートの共通の任務である。党は国際プロレタリアートの連帯と結合を推進し、一国の革命と世界革命の強固な結合を組織するためにたたかう。

労働者人民を革命的階級に形成し、彼ら・彼女らを新たな社会の支配者階級に高めあげていくことを党は死活的任務として重視する。私たちは、日本にマルクス・レーニン主義に立脚した強大な革命的労働者党を建設し、全世界に新たなインターナショナルを組織していくために力をつくす。

私たちはすべての労働者人民に対して共産主義者同盟（統一委員会）に結集し、ともにわが党の綱領のもとに結束してたたかうことを呼びかける。

りわたし、その対価として賃金を得て生活する以外に生きるすべを持たない存在である。生きていくためにはプロレタリアートは、ブルジョアジーのところへ出かけて行って、ブルジョアジーを富ませるために働くほかはない。階級としてのプロレタリアートは資本という不可視の鎖でブルジョア階級総体に縛られた賃金奴隷である。

ブルジョアジーはより多くの利潤を得るために、機械や技術や生産方法を不断に改良していくことに駆り立てられる。それによって労働の生産性は向上し、社会的な富は急速に増大していく。だがそれは人々の生活の向上にはつながらない。資本主義社会では生産力の発展や富の増大は逆に全社会的な不平等を拡大し、労働者・農民・零細商工業者など働く大衆の生活の不確かさと困窮の増大をもたらししていく。資本主義のもとでは、労働の社会的生産力の発展は資本の生産力の発展としてしか現れず、その成果はブルジョアジーによって独占される。

大資本は小規模生産を駆逐してますます巨大になっていく。そして小生産者の一部をプロレタリアートに

転化し、プロレタリアートに対する搾取を強化しながら、社会・経済における支配的地位を強めていく。このもとで、全体として資本に対する賃労働の従属はいっそう強まり、社会的な諸矛盾も拡大していく。

資本は「自由な労働力」としてのプロレタリアートを大量に生み出し、それをみずからの存立の根源的な基礎とするものであるが、しかしだからといって、民族差別などさまざまな形態の抑圧・差別を解消するものではない。逆にそれらは資本主義のもとで新たに再編され、資本主義的發展のテコとして利用されることによって拡大・再生産されていく。

資本制生産においては好況・恐慌・不況という諸段階が循環的くり返される。好況期においては資本の蓄積が進んで生産が活発になり拡張されていくが、それは賃賃を上昇させて利潤率を低下させ、過剰資本を不断に生み出していく。資本蓄積は停滞し、支払能力ある需要の制限を越えて生産される商品は、国内外の市場にあふれかえる。資本主義的生産様式に内在する基本的矛盾は恐慌となって爆発する。恐慌とその後の不況期は小生産者をいっそう零落させ、労働者階級・

争が激化した。国内では超過利潤によって一部の労働者層が買収され、労働者階級はその本来の革命性を宿すプロレタリア下層と上層とに分裂した。帝国主義の時代が、かくして始まった。帝国主義は資本主義の最高の発展段階としての独占資本主義である。帝国主義はまた死滅しつつある資本主義である。

ところで、資本主義は発生その時から世界資本主義である。対外経済関係のない資本主義はなく、それはかならず世界的市場関係、世界経済関係として成立している。世界資本主義は、産業・金融・通貨・貿易など全般にわたって資本主義世界を主導する資本主義、しかも圧倒的な軍事力をもって世界を編成することのできる資本主義国を中心として編成される世界体制である。中心国は非中心国に圧倒的な影響を与え、中心国への経済的・政治的な追従・適合を要求する。第二次世界大戦前はイギリスが、大戦後は米国が中心国の位置を占めた。歴史的には、資本主義諸国の対立・抗争、植民地諸国民の反乱によって中心国は没落し、その行きづまりが恐慌―ブロック化―世界戦争を発生させていく大きな要因となった。

被抑圧人民・被抑圧民族の生活状態のさらなる悪化をもたらす。資本主義の世界的發展とともに、恐慌は世界恐慌という形態をとってしばしば立ち現れるようになる。恐慌は資本制商品生産のもとで生産力が發展することの不可避的な結果であり、みずからつくりだした巨大な生産力をもはやブルジョアジーが統制できなくなっていることを物語っている。かくして社会はもはやブルジョアジーの生存とはあいれなくなる。

2 資本主義の新しい発展段階―帝国主義

こうした土台のうえで、資本主義は二〇世紀のはじめに新たな発展段階に入った。生産と資本の大規模な集積と集中がいっそう進み、独占が生まれた。独占資本主義は自由競争の段階の資本主義にとつて代わった。銀行資本と産業資本が融合して金融資本という新たな資本が形成され、この金融資本の一群が一国の経済・政治の実権をにぎる金融寡頭制が出現した。対外的には商品の輸出とならんで資本の輸出が強まり、資本家の国際的独占団体が形成されて世界が分割支配され、植民地と市場の再分割をめぐる列強間の対立と抗

第二次大戦後、資本と生産の集積と集中は世界的な規模でいっそう進み、国際的独占団体は多国籍企業・多国籍資本という形態をとつて成長した。多国籍企業は全産業部門で世界市場に対する支配力を強め、多国籍企業の大規模な直接投資―産業資本の輸出によって資本主義は戦後世界において世界的な規模でさらに発展しつつあった。多国籍企業は現代帝国主義の主要な経済基盤となっている。多国籍企業間の世界的競争は、それらの利害をそれぞれに代表する各国帝国主義のあいだの対立・抗争を不断に生みだしつつづけている。

現代の大規模化した資本の運動は、過去のどの時代をも上回る破壊力をもっている。恐慌は一国の範囲をこえて世界的な規模で発生するようになっていく。かつて今日では膨大な過剰貨幣資本が投機的に運用され、経済基盤の弱い国々の実体経済に破壊的影響を与えている。独占がますます巨大化する一方で貧困が世界化し、世界的な貧富の格差は異常なまでに拡大しつつづけている。そして人間の生存をも脅かすような危機があちこちで現実化している。第三世界といわれる現代の植民地・従属国における飢餓と貧困の深刻化、国

際環境破壊問題、世界的な失業問題、そして帝国主義による侵略反革命戦争や核戦争の危機などである。

これらは本質上、巨大化した新しい生産力と古い生産関係のあいだの矛盾の表現である。よりグローバルな枠組みを要求している新しい生産力は、私的所有と一國経済（国民経済）を前提とする古い生産関係と衝突しつづけている。この衝突は資本主義・帝国主義のもとでは決して解決できない。解決できないがゆえに、いつそう巨大な次の矛盾の爆発が世界的規模で準備されることになる。いまや発展した新しい生産力に対応し、これを意識的に制御することのできる世界的な生産関係―社会経済制度をつくりあげていくことが人類史的な課題となっている。

すでに資本と商品制のもとではあれ、世界的な規模で社会的生産と流通が組織されている。多国籍資本の生産と流通のネットワークはますます世界を一体化している。これらは世界的な社会革命の物質的可能性、資本主義的生産関係を新しい生産関係に代えていく物質的条件が広がっていることを示している。また他方では資本の運動そのものが、資本の支配を廃絶する革

必要とせず、自分自身の力で社会に必要な財貨を生産し、社会と経済を運営することのできる能力をすでに実際にそなえている。

プロレタリアートは競争や孤立の代わりに結合と団結を生み出していく存在である。プロレタリアートは階級として団結し、団結を不断に高めあげていくことによつて資本や国家と対抗し、資本主義を政治的にも社会的にも乗り越えていくことのできる存在である。またプロレタリアートは他の被抑圧人民と利益を共有し、ともにたたかうことのできる普遍的性格をもつ階級である。プロレタリアートの運動は、資本主義社会の圧倒的多数者階級の自己解放運動であり、階級を廃絶するまで終わることのない永続的な運動である。この運動の勝利は、プロレタリア自己解放闘争を徹底的に推進する共産主義者の党の活動によつて保障される。

4 共産主義

世界革命の勝利にまで永続する革命によつてプロレタリアートは、ブルジョア階級とその国家権力を全世

命をになう主体としてプロレタリア階級とともに被抑圧民族人民とそのたたかいを生みだしつづけている。これらは現代革命の客観的諸条件である。

3 もっとも革命的な階級としてのプロレタリアート
賃金奴隷階級たるプロレタリアートは同時に、資本主義社会を变革して、新しい社会―共産主義社会をつくりだしていく能力をもつ階級である。プロレタリアートの力によつてのみ、資本主義がつくりだした巨大な矛盾は解決され、現代社会はその深刻な危機から脱出することができる。

プロレタリアートは大工業の発展とともに数を増して社会の圧倒的多数者となり、もっとも抑圧された存在として現代社会の最下層を形成している。プロレタリアートは生産手段を何一つもたない無所有であるがゆえに固く団結することのできる階級であり、また国境を越えて世界的な結合を可能とする世界的な階級である。何よりもプロレタリアートは資本主義社会でおこなわれている生産活動の真の主体である。プロレタリアートはもはやブルジョア階級という特別の階級を

界から打倒・掃蕩する。そしてこれを条件にして生産手段の私的所有を国家所有から社会的所有に代え、商品生産を廃止して社会的生産過程を計画的に組織する。生産は社会全体の利益を第一義において計画的におこなわれるようになり、資本主義の時代の無政府的な生産や消費のあり方は根本から転換される。

新たな支配階級として登場するプロレタリアートは、同時に、すべての人間を労働者・生産者に変えて諸階級への社会の分裂をなくし、生産手段の社会化と商品生産の廃絶をとおして階級が存続する条件そのものをなくしていく。階級の消滅とともに、階級支配も国家もその成立の基盤を失う。階級支配と結びついたあらゆる差別・抑圧の根拠がこれによつて取り除かれ、階級社会数千年の歴史に終止符が打たれる。

この無階級社会―共産主義社会において、これまでの社会の歴史はすべて前史となる。階級の廃絶と社会的生産力の発展を条件にして、まったく新しい生産関係・社会関係がつくられていく可能性がここに切り開かれる。何よりも人間の生命活動の根幹を占める労働のあり方が根底から変化する。共産主義社会において

諸個人は社会の一員として社会のために労働するが、ここでの労働は資本主義社会のもとの強制労働―資本家階級の利益のためにおこなわれる賃労働とは根本的に異なるものとなる。労働時間は大幅に短縮され、他の人間的諸活動にあてられる時間が拡大していく。精神労働・肉体労働などの固定的な分業からも人々はじよじよに解放され、労働は人間の第一の生命欲求に転化していく。かくして、あらゆる人々がその能力におうじて働き、その必要におうじて生産物を受け取ることができるといふ、真に自由で平等な協同社会が生ずる。各人の自由で全面的な発展が可能になり、それがまた他のすべての人々の発展と対立するのではなく、その不可欠の条件になっていくような協同社会が生まれていく。

5 プロレタリア独裁

プロレタリアートによる政治権力の奪取から始まる一連の社会革命の不可欠の条件をなすものは、プロレタリアートの独裁である。プロレタリア独裁は共産主義の低い段階としての社会主義にいたる過渡期の政治

権力である。それは打倒されたブルジョア階級を収奪し、その反抗を打ち砕くとともに、プロレタリア権力の成立という新しい条件のもとでの階級闘争と経済建設を通じて共産主義への道を切り開く。

プロレタリア独裁権力は同時に、プロレタリア・被抑圧人民に対しては徹底的に民主主義的な性格をもつ政権である。膨大なプロレタリアート人民を結集し、その自発性・献身性・創意工夫、潜在する能力を引き出し、新しい社会の建設をなす主体へと形成していくためには、形式民主主義としてのブルジョア民主主義を越える、コミニオン理念にもとづくプロレタリア民主主義が必要である。

また、プロレタリア独裁権力は一つの階級独裁権力でありながら、いつさいの階級対立と階級搾取の廃止、国家の死滅を進めていく手段である。プロ独権力のこうした基本的性格は所与のものではなく、たたかいてられるべきものである。それを保障し発展させていく決定的な条件は、プロレタリアートをソビエトに組織しつづけ、国家・社会の実際の統治、政治・経済の実際の運営に広範な労働者人民を参加させつづけること

にある。ソビエトを現実構成し、その発展を実際になう人々がプロレタリア革命の主体である。またプロレタリアートと被抑圧人民が社会・国家の本当の主人公として登場したとき、はじめて階級独裁の道具としての国家死滅の展望は現実のものとなる。

世界革命の勝利に先んじて成立した一国のプロレタリア独裁はまた、全世界のプロレタリアートの階級闘争と結びつきながら、世界革命の拠点―根拠地国家としての役割をになうことを国際主義上の義務とする。一国のプロ独政権は、全世界の被抑圧人民に耐えがたいまでの生活破壊と苦悩を強いている帝国主義とたたかう姿勢を常に鮮明に示しつづけることで、全世界プロレタリアート人民の解放の希望となる。

6 共産主義者の活動

権力奪取・プロ独・社会主義・共産主義という、こうした一連の長大な歴史的事業をプロレタリアートの前衛として、その先頭に立って推進していくのが共産主義者(党)である。プロレタリアートはみずからの解放のために、みずからを政党へと組織化し、自己解

放運動の発展のなかでみずから政党を生みだしていくが、共産主義者(党)はこれらの労働者政党のうち、もつとも断固たる、現実のプロレタリアートの解放闘争をたえず推進していく部分である。また共産主義者は、資本主義社会の崩壊の必然性とプロレタリア解放運動の勝利の根拠を理論的に理解している点でプロレタリアートの他の部分にまさっている。共産主義者(党)は各国のプロレタリアートの闘争において、国籍に左右されない全プロレタリアートの利益をおしつらぬき、つねに運動全体の利益、プロレタリアートの未来の利益を代表するために努力する。

7 ロシア革命の勝利とスターリン主義

これまでの歴史において全世界の労働者階級は、資本の横暴とたたかうにとどまらず、階級の解放をめざしてたたかいつづけてきた。古くは一八七一年、パリで決起した労働者たちは最初のプロレタリア独裁権力―パリ・コミニオンを打ち立てた。二〇世紀に入って一九一七年にロシアで、共産主義党・ボルシェビキ党に指導された革命運動が勝利した。歴史上初めてたた

かいとられたプロレタリア社会主義革命であった。ロシア革命の勝利によって世界は、資本主義が世界的規模で社会主義に移行していく過渡期世界という歴史段階に入った。

ツァーリ専制支配と帝国主義の反革命干渉を打ち破ったロシア革命は、全世界の労働者人民・被抑圧民族を大いに励ました。全世界で階級闘争・反帝闘争・革命運動が前進し、世界社会主義・世界共産主義への現実的な可能性が切り開かれていった。だが、期待されたヨーロッパ革命が挫折し、帝国主義による革命政権に対する重包囲がつづき、戦争による国内経済の荒廃と疲弊のなかで、ロシア革命は厳しい国際的な孤立を強いられた。これを背景にしてレーニン死後、党の実権を掌握したスターリンのもとで革命の歩みは中断され、大きな後退を強いられた。

スターリンはレーニン主義から大きく逸脱し、その誤りは革命の原動力を階級と階級闘争に求めることを拒否する生産力主義と、世界革命を永遠の彼方に追いやる一国社会主義のスターリン主義として体系化されていった。スターリン主義は何よりも、労働者階級に

よる社会主義建設の根源的力を形成していく労働者ソビエトの破壊を進めた。職場ソビエト・工場委員会を根こそぎ破壊し、労働者階級が新たな生産力と社会を形成していくことを不可能にした。また農村において強権的農業集団化を進め、農民が社会主義建設に主体的に参加していく根拠を解体した。周辺諸民族に対しては、民族自決権の承認という共産主義運動の基本原則を否定して大ロシアへの併合政策を進め、被抑圧民族のソビエト権力への参加の道を閉ざし、社会主義のもとでの民族融合の可能性を破壊した。さらに、大規模な「粛正」をおこない、多くの党員・労働者人民を根拠なく殺害・流刑し、恐怖が支配する非民主的な社会をつくりあげた。政治的・経済的特権を確保した一部の国家官僚・党官僚が固定的な特権的支配層を形成するにいたって、人民に対する独裁支配体制が確立されていった。党はプロレタリア階級の前衛としての性格を失い、国家機構の一部に変質した。

他方、スターリン主義は一国社会主義建設路線を固定化し、世界革命の道を放棄した。一国社会主義建設可能論のもとで、ロシア国家の防衛とその影響力の地

理的拡大が革命命令とされた。各国の運動は帝国主義との取引きの圧力として利用され、国際的なプロレタリアートの団結の組織化、帝国主義国革命と植民地革命の結合などの、世界革命の勝利をめざす革命戦略は完全に放棄された。第三インターナショナルの解体はこれらの帰結であった。

8 現代過渡期世界と共産主義運動

けれども第二次大戦後には、植民地・従属国において共産主義者に指導された反帝民族解放闘争が次々に勝利した。一九四九年の中国革命の勝利をはじめ、朝鮮、ベトナム、キューバなどで社会主義を理念とする新政権が立ち立てられた。それらは、新たな中心国・米帝による世界支配、スターリン主義による国際共産主義運動の統制、そして帝国主義国における戦後革命の敗北という状況を打ち破ってかちとられた勝利であった。資本主義国においては、スターリン主義共産党とは別の革命的左翼の潮流が生み出された。日本では一九五八年、日本共産党の誤れる綱領・路線と決別して、レーニン主義の継承をかかげる共産主義者同盟が

結成された。

戦後四〇年以上にわたり米ソ対立の「冷戦」時代がつづいたあと、一九九一年にソ連が解体した。ソ連・東欧圏の崩壊はスターリン主義の破産にほかならなかったが、これにより全世界の共産主義運動は一時的にせよ大きな後退を強いられた。だが少数ではあれ、社会主義をめざす「労働者国家」は存続している。そして何よりもいまや、時代は大きく変化しつつある。

戦後世界において、近代賃金労働者の階級としてのプロレタリア階級は、資本主義の世界的発展とともに全世界で増加しつづけてきた。現代のプロレタリアートもまた、自己解放を求めずにはおかない賃金奴隷階級である。第三世界で増加しつづける労働者階級が強いられる悲惨な労働条件・生活状態は、『共産党宣言』や『資本論』などで描かれたものとまさに同一である。資本主義諸国においては、不安定雇用労働者の増加、失業者の増大、賃金・労働条件の切り下げと権利剥奪といった状況のなかで、労働者階級下層はもとより、上層労働者もこれまでどおりにはやっていけない状況が深まっている。全世界で大量の労働者が、

文字通り賃金奴隷としての地位につき落とされつづけている。

他方で資本主義が作りだす矛盾と災禍は、資本主義に未来を託すことができないことをますます多くの人々に認識させ始めるとともに、資本主義廃絶の要求を内包する大衆的な運動を強めつづけている。二〇世紀末から全世界で反グローバリゼーションと呼ばれる新たな社会運動が高揚し、持続・拡大している。二一世紀に入って、米帝を筆頭とした帝国主義の侵略反革命戦争に反対する歴史的といえる世界的な反戦運動が巻き起こった。各国の階級闘争はますます世界的な結びつきを強めていくすう勢にある。また全世界で増大する労働者階級は、新たな社会の支配階級としての能力を高めつづけている。帝国主義・資本主義の世界支配を転覆し、新しい社会を建設する主体的な根拠は現実の世界のなかに存在している。

ソ連崩壊後、共産主義は資本主義に対する対抗思想としての位置を復権し始めた。スターリン主義の破産を受けて世界的に、社会民主主義潮流やアナキズム潮流、あるいはイスラム主義が一定の台頭をみせてい

る。だが、資本主義の改良にとどまる社会民主主義潮流や、新たな国家のビジョン・変革の戦略をもたないアナキズム潮流、そして階級支配・階級制度の廃絶を抜きにして不正や不正義を批判しているイスラム主義などは、現代世界の根本的変革の問題に答えることはできない。

世界はいぜん過渡期世界としての基本性格を保持しつづけている。ブルジョアジーとプロレタリアートとの世界的な階級対立・階級矛盾が激化し、帝国主義による侵略反革命戦争発動と世界支配が強まるなかで第三世界の被抑圧民族・人民の反抗が高まり、米帝の経済的後退を背景にして帝国主義間の対立・抗争もまた激しくなってきた。これら戦後世界のあり方と動向を規定しつづけてきた現代世界の矛盾が、グローバリゼーションと呼ばれる資本主義の最新の動向のもとで拡大・先鋭化するなか、共産主義運動は新たな時代を迎えようとしている。私たちは危機を深める現代世界に対峙し、新しい共産主義運動の創造をめざしてたたかひぬく。

第2部

(1) 日本革命の基本的性格

今日の日本社会は資本制生産を支配的生産様式とする資本主義社会であり、また資本主義の最高の発展段階としての帝国主義段階にまで到達した社会である。それは次のような経過をたどって形成された。

1 日本帝国主義の形成

日本における資本主義の発展は一八六八年の明治維新をもって本格的にきりひらかれた。明治維新はたんなる封建勢力内の権力移動ではなく、日本における資本主義社会の成立を準備した政治革命であった。だが階級としてのブルジョアジーの未発達に規定されて、この革命は天皇制を中心におく絶対主義的な性格をもつ国家権力を生み出した。この権力はアイヌモシリ、沖縄を併合した。明治維新政府は「富国強兵」「殖産興業」政策を通して、国家主導で大工業の移植など資

本主義的生産様式の育成を強行した。欧米の先進資本主義国が帝国主義段階に移行しつつあったというきわめて不利な条件のもとで出発した日本の資本主義は、国内では飢餓賃金と高い小作料にあえぐ自国内の労働者・貧農の生活を犠牲にし、部落差別や民族差別などをテコに差別・分断支配を強め、また日清・日露・第一次世界大戦とあい次いだ侵略戦争を通じて台湾、朝鮮、中国大陸の一部を占領・植民地支配し強蓄積を進めた。

二〇世紀初頭には日本は帝国主義諸列強の仲間入りを果たし、東アジアの一角に四大財閥という金融寡頭制が支配する独占資本主義国家が登場した。その後、天皇制ファシズム支配体制を確立し、米英とのアジアの再分割戦争（アジア・太平洋戦争）に突入した日本帝国主義は、新たな中心国として登場しつつあった米帝国主義の圧倒的な力量と、アジア諸国人民の反帝民族解放闘争の前に全面敗北を喫した。第二次帝国主義戦争での敗北によって日本の資本主義は壊滅的打撃を受けた。

広大な植民地を失い、戦争によって生産力の徹底的

な破壊を受けた日本資本主義はまさに存亡の危機にあった。この危機を救ったのは、ほかならぬ米帝であった。米帝は日本におけるプロレタリア革命を防止し、中国・朝鮮をはじめとしたアジアの革命運動の前進をおしとどめるために、天皇制を存続させ、日本資本主義を復興させることを必要とした。米帝の庇護下で日本資本主義は息を吹き返した。

戦後日本の歴史は、日本資本主義の帝国主義的復活の歴史であった。奇跡的と言われた戦後日本資本主義の急速な成長は戦前と同様、一方では朝鮮戦争特需に象徴されるようなアジア人民の犠牲のうえに実現され、また他方では、一握りの巨大独占のもとに膨大な中小・零細企業を組み込んだ二重構造のもと、世界有数の長時間・過密労働を国内の労働者階級に強要することによってはじめて可能になったものである。朝鮮戦争によるべく大な戦争特需によって、早くも一九五〇年代はじめには、日本の鉱工業生産は戦前の水準を回復するにいたった。五〇年代中盤から始まるいわゆる高度経済成長期を通じて、重化学工業部門・輸出産業を中心に独占資本の再形成が進み、帝国主義復

帝主義を打倒する革命である。日本帝国主義ブルジョア国家権力を打倒し、国内外のプロレタリア人民に対する支配の根を絶ち、資本主義に代わる新しい社会を建設しようという革命である。この革命は全世界のプロレタリアートと被抑圧人民による解放のたたかいの一部であり、現代過渡期世界をプロレタリアートの解放、階級の廃絶、新たな人類史の創造に向かって切り開いていくプロレタリア世界革命の一部である。

日本革命の主体は、社会の圧倒的多数を占める賃金奴隷階級としてのプロレタリアートと被抑圧人民である。日本社会は支配者階級としての資本家階級と、被支配階級としての労働者階級を二大階級として構成される階級社会である。現代の日本社会は、全就業人口の約4%を占める資本家階級が、約80%の労働者階級と10数%の農漁民を含む自営業者層を支配する社会である。日本の労働者階級もまた他の帝国主義国と同様、上層と下層に分裂しており、少なくとも上層労働者はブルジョアジーによって買収されている。

日本革命は、プロレタリア階級のもつ組織性と力に依拠して行なわれるプロレタリア社会主義革命であ

活の経済的基礎が準備されていた。そして戦後の日本資本主義は一九六五年の日韓基本条約の締結を画期とし、一九七〇年代から八〇年代にかけて米帝に次ぐ経済力をもつ帝国主義として復活と台頭をとげ、米帝のアジア戦略と結びついた帝国主義的対外膨張と帝国主義的軍事・外交を本格的に展開し始めた。

現在、日本帝国主義ブルジョアジーは、全世界の労働者人民、とくに第三世界諸国の人民に過酷な支配と収奪を強い、絶望的な貧困をおしつけている国際帝国主義の強力な一角を占めている。そして日帝はみずから帝国主義的権益をアジア・全世界に広げていくために、軍拡と侵略反革命戦争の道を歩みつけている。それはまた、国内における政治反動と支配体制の強化、圧倒的多数の労働者人民に対する搾取・収奪の強化、零落の強制と一体のものである。こうした日帝ブルジョアジーの独裁権力は、日米軍事同盟にもとづいて駐留する米軍によって補完されている。

2 日本革命の性格と特質

私たちがめざすべき当面の革命は、このような日本である。それはまた広範な被抑圧人民・被差別大衆を結集し、日本ブルジョア階級と米帝をはじめとする国際帝国主義との闘争に膨大な大衆の参加を組織して勝利する革命である。プロレタリアートはこの革命において指導階級としての役割を果たし、小ブルジョア階級である都市中間層・農漁民の反政府闘争を支持し援助するとともに、そのなかから革命の味方を組織し、日本のブルジョア政府とたたかうあらゆる進歩的社會勢力を革命の同盟軍として引きつける。

日本革命の基本的性格の一つは、これまで敗北を重ねてきた帝国主義本国における革命であるということにある。いわゆる先進国革命の敗北はロシア革命に国際的孤立を強い、スターリン主義が発生する一条件となった。また戦後においては、先進国革命運動の遅滞のなかで、第三世界の反帝民族解放闘争は大きな苦闘に直面しつづけてきた。こうした共産主義運動における負の歴史をくつがえしていく革命という意義を、日本革命はもっている。アジアにおいて日本は唯一の帝国主義国であり、日本のプロレタリア革命が他のアジア諸国の革命運動におよぼす影響は大きい。日本革命

の勝利とアジア革命の勝利は不可分一体の関係にある。日本革命はアジアの労働者人民の解放と連動し、アジアの反帝民族解放闘争の勝利と結合する革命である。

プロレタリア革命はまずブルジョア国家権力の打倒から始まるが、それは通常、暴力革命によってしかない。日本における革命は議会における多数派形成によっても、また農村や山岳地帯を拠点とする解放区型革命によっても勝利しない。国家権力打倒の戦術の中心にすえられるべきはプロレタリアートの武装蜂起戦術であり、その勝利を可能にする革命的組織を日本のプロレタリアートは建設しなければならない。

革命党は日本のプロレタリアートをひきいて、まず自国のブルジョアジーを打倒し、プロレタリアートの権力—プロレタリア独裁を打ち立てねばならない。プロ独下において党はプロレタリアートの階級闘争を組織し、人民の団結を社会主義に向けて形成し強化する。このためにプロレタリア独裁政権の基本的方策は策定される。プロ独政権の政綱については、ロシア革命の勝利を通じて樹立されたロシア・プロ独政府の経験

と、これを指導したボルシェビキ党のプロ独綱領（一九一九年の党綱領・後半部分）から私たちは大いに学ぶ。同時に一国のプロ独綱領の内容はそれが立脚する時代状況と、その社会の特質や発展段階によって大きく規定されるという点をふまえる。私たちの党は、革命前の当面するもつとも重要な政治的任務として、政治・経済・社会・国際の各分野で次のような基本政策をもつプロレタリア独裁権力を樹立していくことにかがれる。

(2) 日本におけるプロレタリア独裁政権の政策についての基本的考え方

1 政治の分野で

- (a) ブルジョア議会制度を廃止し、ソビエトを基礎にしコミューンの原則にもとづいて運営される革命政府を樹立する。
- (b) 日米安保条約を破棄し、米軍基地を全面撤去する。
- (c) 警察機構とブルジョアジーの常備軍—自衛隊を解体し、全人民の武装のもとに民兵制度と赤軍を創設

する。

- (d) ブルジョア国家機構・官僚機構を解体する。天皇制を廃止する。

- (e) 旧制度の裁判所を廃止し、裁判官を労働者のなかから選出する。

- (f) 勤労人民に集会・結社・出版・信教の自由などの諸権利を保障する。

- (g) 性・人種・民族・宗教の別にかかわらず同権を保障する。アイヌ、沖縄人民の自己決定権を承認する。被差別大衆の差別糾弾権を保障する。

2 経済の分野で

- (a) 生産手段の社会化をめざし、主要産業・金融機関・運輸機関を国有化する。大土地所有を廃止する。

- (b) プロ独国家の生産力を発展させ、プロレタリアートが生産の決定権を握る社会主義的生産を準備する。

- (c) 平等の労働義務制度を導入する。

- (d) 資本主義下の無計画的な大量生産・大量浪費型生産様式を根本的に転換する。

- (e) 生産協同組合・消費協同組合を発展させ、全国的な規模で組織された生産物の流通ネットワークをつくりだす。

- (f) 農業における共同生産の組織化を進める。

- (g) 勤労人民の労働の軽減と生活の向上をはかる。

- (h) 強度の累進税を導入する。

- (i) 相続権の廃止を進める。

3 社会の分野で

- (a) 勤労人民を国家統治・経済の運営の仕事に広範に参加させる。

- (b) 勤労者の同志的規律、自主的活動、責任感を強めていく系統的な大衆教育活動を行なう。肉体労働者と精神労働者との相互理解と接近を促進する。

- (c) 政党、労働組合、協同組合、NGOに自主的活動を保障する。労働者には団結権・交渉権・ストライキ権が保障される。

- (d) 学校と教育を社会主義建設の手段に変える。無料の義務教育、男女共学制、授業と生産的労働の結合、少数民族の母語による教育の保障などを実行する。

科学的教育の推進によつて、あらゆる反動的偏見から人民を解放する。

- (e) 宗教と国家を分離する。
- (f) 自然環境破壊の進行を防ぐ。資源の収奪と大量消費に依存した生活様式の根本的転換を進める。
- (g) 無料の医療制度を確立する。労働者の住宅事情を大幅に改善する。高齢者に対する完全な社会保障を実施する。

4 国際的分野で

- (a) 日本帝国主義政府が結んだあらゆる帝国主義的条約・協定を破棄する。
- (b) 第三世界における日本帝国主義のすべての権益・債権を放棄する。日本帝国主義の戦争責任・戦後責任を明確にし、戦後補償を行なう。諸民族の同権を擁護し、被抑圧民族の民族自決権を支持する。
- (c) 第三世界の飢餓と貧困の問題の解決に力をつくす。
- (d) 帝国主義とたたかう国際的階級闘争・革命運動をあらゆる形態で支持・支援し、世界革命・世界プロ

- 資本の攻撃と大衆的・戦闘的にたたかう階級的労働運動をつくりだす。
- (e) 長時間労働の強制に反対し、労働者の精神的・肉体的磨滅を防止する。同一価値労働・同一賃金の原則を掲げ、非正規雇用労働者に対する差別の禁止を要求する。時間外労働・夜間労働の原則禁止を要求する。
- (f) 農産物輸入自由化等による農業破壊に反対する。
- (g) 日本帝国主義の戦争責任・戦後責任を明確にし、責任者の処罰、被害者に対する謝罪・賠償を行なわせる。
- (h) 入管体制に反対し、在日・滞日外国人の市民権の確立をめざす。
- (i) 女性差別、部落差別、障害者差別、民族差別などあらゆる差別に反対する。
- (j) 大気・海洋・河川・土壌汚染などの環境破壊に反対する。地球温暖化の防止。
- (k) 原子力発電所の新設・増設、既存原発諸施設の即時運転の中止を求める。
- (1) 差別・選別・管理教育に反対する。愛国心教育に

レタリア独裁の実現をめざす。

(3) 革命の準備

日本におけるプロレタリア独裁政権の樹立に向けて党は、当面、次のような任務をにかけてたたかう。

- (a) 日本帝国主義による軍拡と侵略反革命戦争に反対する。天皇制・天皇制イデオロギー攻撃とたたかう。核兵器の廃絶を要求する。日米安保・戦争・憲法改悪に反対する全人民的政治闘争と政治統一戦線を建設する。
- (b) 帝国主義とたたかう全世界の闘争に連帯する。反グローバリゼーション運動の発展をおし進める。
- (c) アジア諸国の階級闘争・革命運動と日本プロレタリアートとの結合を推進する。アジアにおいて日米帝の支配とたたかう反帝統一戦線を形成し強化する。戦闘的労働組合のアジア・ネットワークを形成する。アジア・インターを建設する。
- (d) 労働運動に革命の強固な基盤を築きあげる。国家・

反対する。

- (m) あらゆる人々に健康で文化的な生活を営む権利を保障する福祉制度を要求する。
- (n) ささまざまな反政府的・進歩的運動を支持・支援し、その発展を進める。
- (o) 国政・地方議会選挙を革命的に利用する。
- (p) あらゆる治安弾圧法を撤廃させる。
- (q) 国家権力やファシスト勢力の攻撃から階級闘争と革命運動を防衛する。プロレタリアートの自衛と武装力の強化をはかる。
- (r) 軍隊内の兵士を革命の側に獲得する。
- (s) 日本プロレタリア階級にしっかりと根をおろし、ブルジョア国家権力と非妥協的にたたかう革命的労働者党を建設する。

このような要求と闘争に日本プロレタリアートを組織することを通じて、その政治意識を高め、革命的階級へと形成し、プロレタリアートを中心とした革命勢力を広範に組織し強化していくこと―日本革命の準備期における私たちの根本的任務はここにある。

戦術・組織テーゼ

戦術テーゼ

統一党の戦術に関して私たちは以下の見解を提起する。

(1) 戦術観の転換

統一党の戦術を確立していくために、ブントに代表されるこれまでの革命的左翼の戦術観を総括づけ、マルクス・レーニン主義に立脚した新たな戦術観を明確にしていかなばならない。

マルクス主義における戦術の基礎は『党宣言』において提起されている。ここにおいては、プロレタリアートの革命性に依拠し、階級闘争としてあらわれるプロレタリアートの自己解放闘争を資本主義の廃絶と共産主義の世界的な実現という最終目標に向けて発展させつづけること、そのような革命の主体としてのプロレタリアートを形成すること、ブルジョアジーの支配

を転覆してプロレタリアートの政治権力を獲得し、これを通してプロレタリアートを支配階級に高めあげていくこと―共産主義党の戦術はこれらに目的づけられねばならないことが明確に規定されている。レーニン主義の戦術観もまた、基本的にこのようなマルクス主義の戦術観に立脚し、これをさらに発展させようとするものであった。

私たちはマルクス・レーニン主義の戦術観を復権し、これに依拠していかなばならない。そうしたとき、かつての第一次ブント、第二次ブントの戦術観を克服していくことが問われる。それらは大きな限界と誤りを内包するものであった。

第一次ブントは、日本共産党の議会主義・平和革命、プロレタリア独裁の否定、一国主義と分岐し、暴力革命・プロレタリア独裁・世界革命を原則的立場として結成された。ブントは日本革命党建設の最初の基礎をしくとともに、六〇年安保闘争という歴史的大闘争をその前衛として牽引した。しかし、第一次ブントはこうした原則宣言以外には戦術についての明確な立場をもっておらず、結果的には社共・総評を中心とした六〇の圧倒的多数を社共・総評のもとにゆだねたまま、主要には少数の先進的労働者・学生のたたかいは戦術的に先鋭化させていくことにしか責任を負わないものであった。この意味においてそれは、社共・総評に対する左翼反対派の戦術という性格を色濃くもつものであった。

〇年安保闘争の最左派という位置にとどまらざるをえなかった。第二次ブントは第一次ブントの実践の地平を大きく乗り越え、先進的労働者・学生を反帝統一戦線と階級的労働運動のもとに独自に組織した。そして、六〇年代末の階級闘争の高揚を自国帝国主義打倒の革命に転化するためにたたかいいた。だが第二次ブントは、権力闘争の組織化とプロレタリアートの革命的階級への形成という二つの基本的任務を原則的に結合することができず、いわゆる「政治過程主義」「戦術・戦術主義」として批判される誤りにおちいった。

第二次ブントの戦術観の混乱と誤りは、この「戦術・戦術の党」という党の欠陥と結びついた誤りであった。すなわち、党が綱領において結束しているのではなく、高揚する階級闘争をいかに権力奪取に接近させるのかという当面の戦術において結束しているという転倒である。このような党の欠陥を克服し、プロレタリアートの自己解放闘争の前衛として結束した党を建設していくこと、これが第二次ブントの戦術観の混乱と誤りを突破していく前提となる。

また、第二次ブントの戦術観は、プロレタリアート

の圧倒的多数を社共・総評のもとにゆだねたまま、主要には少数の先進的労働者・学生のたたかいは戦術的に先鋭化させていくことにしか責任を負わないものであった。この意味においてそれは、社共・総評に対する左翼反対派の戦術という性格を色濃くもつものであった。

私たちは戦術についての意志一致の中心を権力奪取の方法におくという一面的な戦術観から転換していかなばならない。マルクス・レーニン主義の戦術観において、権力奪取の方法は決定的に重要ではあっても党の戦術の一部を構成するものにすぎない。重要なことは、さまざまに変化する階級闘争のあらゆる局面・段階をつらぬく党の戦術の目的を明確にすることである。それは全体としての労働者階級の階級形成に責任をもつということであり、権力奪取が直接の課題となる以前の時代においては、プロレタリアートの階級意識と革命性を発展させ、その階級的団結組織を革命的組織―ソビエトへの組織化にまで発展させ、プロレタリアートを新たな支配階級へと高めあげていくことである。戦術原則という表現をもちいるならば、このこ

とが私たちの戦術を規定する原則にはかならない。現実のプロレタリアートを革命的階級へと形成し、現社会を根本的に変革していく新たな支配階級へと高めあげていくための党の長期的な実践的任務が明確にされねばならない。

(2) めざすべき革命と権力奪取の戦術

打倒すべき敵

日本は高度に発達した資本主義国—帝国主義国であり、日本のプロレタリアートが打倒すべき敵は日本帝国主义である。日本帝国主义は、日本のプロレタリアートと被抑圧人民・被差別大衆を支配するだけでなく、現在ではアジアを中心とした他国のプロレタリア人民を搾取・収奪・支配し、米帝を中心とした帝国主義による世界支配の重要な一部を構成している。

このような日本帝国主义の国家権力は、ブルジョアジーの独裁権力である。日本帝国主义は、すでに世界で有数の軍隊を保持し、高度に発達した官僚機構・警察機構を中心としたブルジョア独裁支配のための機構

を有している。日本のブルジョアジーは、階級支配の道具として天皇制を強化し、ブルジョア独裁権力の重要な支柱としてきた。また、日米安保にもとづいて駐留する米軍は、侵略反革命戦争のために全世界に展開する軍隊であるとともに、日帝ブルジョアジーの独裁権力を補完し、本質的に日本における階級闘争と革命運動の発展に敵対する反革命の軍隊である。

依拠すべき階級

日本の被支配階級層の圧倒的多数を占めるのは六五〇〇万人のプロレタリアートである。いま日本のプロレタリアートは帝国主义グローバリゼーションのもとで、正規に雇用された大企業基幹労働者を中心とした少数の上層労働者と、不安定雇用労働者・非正規雇用労働者を中心とした多数の下層労働者に分解し、失業者もますます増大しつつある。帝国主义超過利潤を経済的根拠として成立した「総中流社会」とかつて言われた社会は大きく変貌し、日本のような帝国主義国においても階級矛盾が先鋭化しつつある。他方で、農民や自営商工業者などの小ブルジョアジーもまた帝国主

義グローバリゼーション・新自由主義政策によつて大きな打撃をうけている。

帝国主义グローバリゼーションと日本帝国主义の延命戦略は、多くの被支配階級層の人民に厳しい犠牲をもたらしてきているが、私たちが依拠すべきは人民一般ではなくプロレタリア階級であり、とりわけその多数を占める下層プロレタリアートである。これらのプロレタリアートだけが、ますます激しくなる犠牲と苦悩からの解放を資本主義の廃絶と結びつけ、世界的規模で社会主義・共産主義社会を建設していくことができる革命的階級としての本性を持ち合わせていると考えるからである。

同時に私たちは被抑圧人民・被差別大衆の解放闘争の発展のために努力し、日本帝国主义の打倒に向けてともにたたかう。

権力奪取の戦術

日本のプロレタリアートがめざすべき革命は、日本帝国主义を打倒するプロレタリア社会主義革命であり、警察・官僚・軍隊・天皇制を重要な支柱とし米軍

によつて補完されたブルジョア独裁権力を打倒し、プロレタリア独裁権力を樹立することを目的とした革命である。

この革命にあたって、プロレタリアートはブルジョア議会などできあいの国家機構の利用を主要な方法とすることはできない。現在の日本の国家権力は、いかに民主主義的装いをこらそうともブルジョアジーの独裁権力であり、その国家機構はブルジョアジーが他の被抑圧階級を支配するための暴力装置である。プロレタリアートは、このブルジョアジーの国家権力を暴力革命によつて打倒し、警察・官僚・軍隊・天皇制などの権力機構を解体することなしに、自らの権力を樹立することはできない。

日本における権力奪取のための主要な戦術は、プロレタリアートの全国一斉武装蜂起である。高度に中央集権化されたブルジョアジーの国家権力機構が狭い国土にはりめぐらされ、プロレタリアートが被抑圧人民の圧倒的多数を占める日本においては、農村・山岳地帯に解放区を建設し、都市を包囲するという解放区戦術は成立しない。また、都市ゲリラ戦術も権力奪取の

主戦術としては成立しない。日本においては、ソビエトに団結したプロレタリアートが他の被抑圧人民・被差別大衆を引き入れ、労働組合のゼネストや軍隊内の反乱などと結合しつつ、全国の主要都市において武装蜂起することによってのみ権力奪取に成功することができる。

(3) 階級闘争の再建と革命の準備期における党の戦術

日本帝国主義の打倒とプロレタリア社会主義革命の勝利に向けて、日本における階級闘争を再建し、プロレタリアートを革命的階級へと形成していくために全力をあげてたたかわねばならない。一九九〇年代初頭のバブル経済の破たん以降、日本帝国主義は十年を越える深刻な長期不況におちいり、経済的危機を深めてきた。その根拠は、日本帝国主義がグローバリゼーションへの対応において立ち遅れ、ますます激しくなる帝国主義間抗争、世界的な資本間競争のなかで劣勢に立たされてきたことにある。この危機から脱出するために、日本帝国主義は次のような延命戦略を推進して

きた。すなわち、①帝国主義間抗争、国際的な資本間競争に勝利しうる巨大独占資本・多国籍資本を編成し、東アジアをみずからの支配圏として再度確立すること、②自国の海外権益をみずからの軍事力によって防衛できる帝国主義へと飛躍すること、有事法制・憲法改悪による侵略反革命戦争態勢を確立し、国家権力機構を再編していくこと、③労働者の非正規雇用化、社会保障・社会福祉の切り捨てなど労働者人民に犠牲を集中させていくことである。そしてこのもとで、差別・排外主義扇動が強まり、民間ファシズム勢力も伸張している。

日本における階級闘争は、一九六〇年代後半から一九七〇年代前半を頂点とした高揚期が過ぎ去って以降、長期にわたる後退期・低迷期のなかにあった。しかし、グローバリゼーションとこれに対応しようとする日本帝国主義のこのような延命戦略は、日本の被支配階級層の状態をいま大きく変貌させていこうとしており、そして、そのなかに階級闘争の新たな条件が生まみ出されてきている。この客観条件の変化と共産主義運動の主体の側の条件の変化が結合するならば、階級

闘争の新たな前進を切りひらいていくことができるという可能性がはっきりと示されつつある。

日本における階級闘争がなお低迷期を脱していない主体的根拠は、ブルジョア側の「連合」による労働運動の支配を基礎にした新たな階級支配の構造を編成してきたにもかかわらず、共産主義運動の側が崩壊した戦後階級闘争構造に代わる新たな階級闘争構造の建設に立ち遅れてきたことにある。その結果、プロレタリアートは階級闘争に立ち上がっていく水路を断ち切られ、現在の階級闘争の否定的状況がもたらされてきたのである。私たちは階級闘争の一部だけではなく、階級闘争の全体に責任を負う党をこそめざす。崩壊した戦後階級闘争構造に代わる新たな階級闘争の全国的・地方的な構造を建設していくたかいかいを通じて、こうした現状を根本から変えていくことが求められている。ここにおける私たちの主要な任務は次の諸点にある。

1 階級的労働運動

まず、階級的労働運動とその全国的・地方的構造を

建設していくことである。私たちは、日本の階級闘争を基礎から再建し、プロレタリア階級に根をはる革命的労働者党の建設をおし進めていくために、多くの先進的労働者とともに階級的労働運動とその全国的・地方的構造の建設をめざす。プロレタリアートのもっとも広範で基礎的な階級的団結組織は労働組合である。各地方において労働組合の共闘体・連合体をつくりだし、この基礎のうえに労働組合のナショナルセンターの建設を展望する。

下層プロレタリアートの過半が非正規雇用労働者になっていくという条件の変化に対応して、新たな地域労組の組織化と企業内労組の変革、これらの結合によって地方的・地域的な労働運動の新たな拠点となる構造が編成されねばならない。私たちは重大な決心をもって新たに党員を労働運動内部に配置するとともに、労働者党員を新たな任務へと出撃させていく。

2 全人民政治闘争

階級的労働運動は全人民政治闘争と固く結びつけられねばならない。経済闘争と政治闘争の結合という観

点をふまえ、もつとも広範なプロレタリアート人民を、ブルジョア政府の政策と支配に反対する闘争に組織していくためにたたかわねばならない。そして全人民政治闘争のための政治的統一戦線を建設するとともに、これをプロレタリア国際主義に立脚し、日本帝国主義の打倒とプロレタリア社会主義をめざすものへと変革していくことである。私たちが組織すべき政治闘争は、日本共産党のように議会選挙におけるみずからの議席の増大に収れんするような政治闘争であってはならない。また革共同革マル派のようにみずからの党の同心円的拡大を目的とした宗派主義的なものであってならない。私たちの組織すべき政治闘争は、その政治要求においていまだ未発展なものであっても、階級的労働運動を中心とした全人民政治闘争のための政治的統一戦線の建設を推進し、これをその内部から反帝国主義をもって変革していくことをめざすものでなければならぬ。

私たちはこの十年をかけて、アジア共同行動（AWC）日本連に結集する人々とともに、アジア人民への連帯と国際共同行動を推進するというたたかいを組織

してきた。このたたかいをさらに発展させつづけることを主体的条件にして、私たちは全人民政治闘争を変革し、日本の広範なプロレタリアート、被抑圧人民・被差別大衆を日本帝国主義打倒とプロレタリア社会主義革命にまで領導するという新しい努力へと向かわねばならない。

3 反帝国国際共同闘争

アジア革命と日本革命の歴史的な結合を展望して、アジア人民への連帯と反帝国国際共同闘争を推進し、アジアにおける反帝国国際統一戦線を建設していくことである。このことがもつプロレタリア国際主義の復権、アジア・インターの建設を焦点とした国際共産主義運動上の意義についてはもはや明らかである。あらためて明確にしておかなければならないことは、崩壊した戦後階級闘争構造に代わって建設すべき新たな階級闘争の構造は、アジアにおける階級闘争と結合し、アジアにおける反帝国国際統一戦線の一翼を構成するものとして建設されなければならないということである。私たちは、アジア各国・地域における原則的な共産主義

党・先進的部分とともに、アジアにおける反帝国国際統一戦線へと発展させるべきAWCを建設してきた。それは日本階級闘争の再建にとってまた不可欠の努力にほかならない。

4 その他の被抑圧人民および諸階級の闘争に対する党の態度

プロレタリアートは他の被抑圧人民・被差別大衆のたたかいの先頭に立ち、すべての被抑圧人民・被差別大衆による独占資本や政府の圧迫に対する反抗をプロレタリア階級闘争の一翼へと組織しなければならぬ。とくに当面、次の闘争に積極的に取り組んでいく。

沖縄解放闘争 沖縄人民の自己決定権を支持し、沖縄・「本土」をつらぬく階級闘争の結合を組織する。沖縄侵略反革命前線基地強化との闘争は、ひきつづき沖縄解放闘争と反安保闘争の要である。名護・浦添をはじめとする新基地建設反対のたたかいを推進する。

反基地闘争 日米安保体制のもとで侵略反革命の出撃

拠点として存在する全国の自衛隊基地・米軍基地の撤去を求める現地住民の闘争に連帯し、これを促進・発展させていく。

女性解放運動 現在の広範な女性運動内部において、プロレタリアートの政治性・階級性を前進させていく。またプロレタリア女性解放運動の独自の建設を進めていく。帝国主義フェミニズムと分岐し、被抑圧民族内の女性解放闘争と結合したプロレタリア女性解放運動としてこれらを発展させていく。

部落解放運動 部落大衆自身の独自団結組織の建設を支持・擁護するとともに、部落解放運動を労働者階級自身のたたかいの課題として組織する。激化する差別・排外主義攻撃と対決し、狭山闘争をはじめとする差別糾弾闘争への決起を組織する。

障害者解放運動 障害者自身の独自団結組織の建設を支持・擁護し、解放闘争の発展のためにたたかう。隔離・抹殺攻撃と対決する精神障害者・障害者による自立解放闘争を支援し、その発展をかちとる。

被爆者解放運動 被爆者・被爆二世のたたかいに連帯し、反戦・反核・反原発運動を推進する。被爆者・

被爆二世・三世に対する国家補償を求める。

三里塚闘争 反帝国主義闘争の一拠点として、三里塚闘争を守りぬく。たたかう農民と連帯し、軍事空港粉砕闘争を支援してたたかう。

在日朝鮮人・韓国人運動 在日朝鮮人・韓国人に対する差別・排外主義を許さず、その民族的・民主的諸権利を擁護し、共同のたたかいをつくりだしていくためにたたかう。

在日・滞日外国人運動 差別と分断・同化と追放の入管体制とたたかい、在日・滞日外国人とその家族の諸権利を擁護し防衛する。

NGO運動その他 市民的運動として表出するNGO運動などを、本質的にプロレタリア階級闘争と無縁な他階級の運動とみなすのは誤りである。その多くがプチブル的側面を有しているとはいえ、NGO運動はプロレタリアートの社会運動への参加形態となりうる。こうした運動形態を、党はプロレタリア階級闘争の一翼に包含していかねばならない。また、研究者・大学教授・弁護士などのインテリゲンチヤ・専門家を、共産主義運動と階級闘争の側に獲得

していかねばならない。

学生運動 独自の階層的性格をもつ運動として学生運動をとらえ、その大衆的・全国的発展を組織する。同時に、学生運動の内部に階級の分岐を持ち込み、運動の階級の発展を追求する。また先進的学生の階級形成を意識的に進め、先進的學生を党のカードルとして獲得する。

5 国際活動と新たなインターの創設

日本におけるプロレタリア社会主義革命に向けたたたかいと、国際的な階級闘争・革命運動を発展させていくプロレタリア国際主義にもとづくたたかいを、私たちはしっかりと結びつけて組織していかねばならない。日本におけるプロレタリア社会主義革命は、プロレタリア世界革命の一部という性格をもつものである。とりわけ、アジア革命と日本革命は、きわめて緊密な相互関係にある。それゆえアジア革命―世界革命の準備は、私たちの戦術の重要な一部を構成する。資本主義の廃絶―社会主義・共産主義の実現は世界

的にしかありえないという確信に立ち、全世界のブルジョアジーの打倒とプロレタリアートの解放をめざして国際プロレタリアートの連帯と団結の形成を進めた第一インターナショナル以来のインターの歴史を私たちは継承する。また私たちはプロレタリアートが抑圧民族と被抑圧民族とに分裂し、国家によって分断されているという帝国主義段階において、プロレタリアートの国際性に立脚して全世界のプロレタリアート人民に分断の壁を越える団結の重要性を訴え、世界党の建設をめざしたレーニン第三インターのプロレタリア国際主義を継承する。とくに、帝国主義国の抑圧民族プロレタリアートがあらゆる排外主義とたたかい、被抑圧民族の民族自決権を擁護し、被抑圧民族プロレタリアートの階級闘争に連帯・援助することが決定的に重要であるというレーニンの提起を、私たちは帝国主義国の共産主義者としての責務にかけて復権していかねばならない。

レーニン主義・第三インターを継承し、新たなインターを創設するための努力が全世界の共産主義者によって開始されていかねばならない。時代はまさにその

ことを要求している。私たちはこの新たなインターを創設していくための歴史的な努力をまずアジアに焦点づけ、アジア・インターの創設を展望する。

日本革命とアジア革命―世界革命の結合を展望し、日本階級闘争とアジア・世界の階級闘争を結合していくことを重点におきながら、国際活動を政治闘争、労働運動、党関係の三つの領域で進める。日帝の位置からして国際活動においてはアジアを重視し、次のような活動に取り組む。

①AWCをアジアにおける反帝国主義国際統一戦線として建設・強化する。②労働運動のアジア的ネットワークの形成を追求する。③アジア・インターの創建という歴史的展望は、各国階級闘争の発展とその結合という基礎があつてはじめて実践的なものとなる。当面、政治闘争や労働運動における国際的共闘を基盤にして、反帝国主義を基軸にした党間の連帯関係の形成を積極的に推進する。

新たなインターの創建を展望した時、アジアだけでなく欧米諸国や旧ソ連・東欧圏などの左翼との交流や意見交換も必要となる。その場合には、スターリン主

義支配の崩壊以降、これを克服しようと志向し、新たな共産主義運動を追求しようとする部分に着目する。当面、国際反戦闘争を実践基軸とした全世界の左翼政党との共闘関係の形成を展望する。

6 ブルジョア議会に対する態度

ブルジョア議会での多数派形成を通じた議会革命の道を私たちは否定する。しかし、ブルジョア議会を革命的に利用することは否定してはならない。選挙活動や議会活動は、大衆的政治暴露と人民の組織化の有効な手段たりうる。まず拠点地域における自治体議会への進出をめざし、広範な大衆のなかでの党活動を大胆に推進する。

7 諸政党に対する態度

日本共産党はスターリン主義党としての本質を温存したまま、現在、政治路線上は社会民主主義路線に純化している。だが日本共産党は、労働者・被抑圧人民の不満を広範に糾合する側面を保持しているがゆえに、人民の組織化をめぐる最大の党派闘争の対象であ

る。日本共産党は帝国主義国内で発生する社会排外主義の政治的代弁者である。また、革マル派をはじめとしたすべての宗派主義との分岐を鮮明にし、その敵対とたたかわなければならぬ。反帝国主義・プロレタリア主義・国際主義を基軸にして、日本共産党・革共同両派と分岐した独自の革命勢力の形成を展望する。全人民的政治闘争を組織する政治統一戦線上は当面は、日本共産党を含むもつとも広範な統一戦線政策を承認し促進する。現在の局面では、広範な階級闘争の条件を形成すること自身が重要な意味をもつからである。

8 宣伝・扇動活動

中央機関紙（全国政治新聞）『戦旗』を発行し、その大衆化・発行頻度の短期化を実現する。他方で、中央機関誌（理論誌）『共産主義』の定期的発行をめざす。各地方あるいは各産別・各戦線で独自の機関紙・誌の発刊も追求する。また党のホーム・ページを開設し、インターネットなど最新の情報伝達手段を活用した宣伝扇動活動も発展させていく。

組織テーゼ

私たちは過去のブントが組織論を明確に確立していなかったために、十分な組織活動を生み出せず、また党内論争を組織化できずに無用な混乱をもたらし、組織の分散化と混乱におちいついていったことをしっかりとふまえ、これを越えていく決意をもって統一党の組織論をつくりあげていかねばならない。

私たちがめざすプロレタリア革命党の組織論の基本的ベースは、何よりもマルクス主義の革命的労働者党論にある。このマルクス組織論を踏まえない一切の組織論は本来の労働者階級の党たりえない。私たちの党組織建設は、まず綱領・思想的にはマルクスの革命的労働者党論にしっかりとふまえつつ、実践の体系としてはレーニン主義の組織、ボリシエビキ組織を継承していくものでなければならない。

1 マルクス革命的労働者党論

ブントの党建設の立ち遅れは、党組織論を革命論の重要部分として組み込み、これを革命的活動の基礎におくことができなかつたという弱さに大きく起因している。党建設のブント的限界を越えていくために私たちは、マルクスを指針とし、党とはプロレタリア自己解放の綱領に基礎づけられた組織的結集体であり、かつプロレタリアを現実支配階級へと形成していく任務を推進する組織的結集体であるということを、党建設の前提として明確にする。すなわち、プロレタリア解放綱領を基礎にして、プロレタリアの階級形成を実践的におし進める共産主義者・革命家の組織的結集体が、私たちが建設すべき革命的労働者党なのである。

共産主義者―革命的労働者党の活動は、労働者階級の解放にとつてきわめて重要な位置をもっている。マルクスは共産主義者の党の活動なくしては、プロレタリアの解放―共産主義社会の建設は困難であることを『党宣言』で打ち出し、党の綱領的立場とした。プロレタリアは革命的労働者党の存在と活動を前提にして、はじめて、もつともよく自己を解放していくこと

ができる。党とはプロレタリア自己解放の手段であり、そのきわめて重要な媒体である。

マルクスによれば「労働者階級の解放は労働者階級自身の事業である」(第一インター規約)という基本思想・綱領的立場のうえに革命的労働者党は成立するとされている。『党宣言』では労働者階級の自己解放運動は労働者階級の階級としての形成を一方では進めるが、他方では「政党としての組織化」を生み出すという立場が明確に打ち出されている。労働者階級が党を生みだしていくという思想・綱領的立場の確立がぜひとも必要である。ここが党建設にさいして、あらゆる小ブルジョアの傾向とたたかう拠点となるのである。そしてこれにふまえるならば、私たちの党、すなわち革命的労働者党は、当然にも労働者党の「部分」として成立するということになるのである。

私たちはマルクスが、革命的労働者党の存在の根拠が労働者階級の現実の運動のなかにあること、そして革命的労働者党は労働者が生み出す労働者党と同一の基盤において成立している、ということを展開した立場をしっかりとおさえておかねばならない。とくに観

念的な「思想」と「党」を、また労働者階級の基盤とは切れた「思想」「党」をデッチあげるあらゆる宗派・思想集団の腐敗とたたかいぬいて労働者党を建設していかなければならない。

マルクスは、革命的労働者党の成立のこの根拠にふまえて、この党の内容と存在意義について明らかにしている。革命的労働者党は次の諸点において、他の労働者政党とは異なる革命性・党派性をもっているということである。第一に、革命的労働者党はプロレタリアの自己解放運動のなかにあつて、このプロレタリアの自己解放運動を実践的に、確固として「絶えず推進していく」ということである。党とは現実の労働者の運動を実践的に牽引し発展させていく存在である。第二に、革命的労働者党は理論的にプロレタリア解放の条件・進路・一般的结果を理解する点で労働者大衆よりまさっているということである。すなわち党はプロレタリア自己解放運動の前進が必然的に資本主義社会を止揚し、共産主義社会を建設していくこと、プロレタリアの自己解放が共産主義社会の建設によって実現されていくということを理解しているのであつて、

『党宣言』で展開されているように「資本主義批判―プロレタリア措定―党建設―共産主義」の立場を思想・綱領にしているということである。第三に、種々の民族的な闘争において国籍に左右されない全プロレタリアートの共通の利益を強調し、そのための活動をおしつらぬくということである。革命的労働者党は他の労働者政党とは区別されてあくまでプロレタリアートの国際的の利益を強調する、すなわち、プロレタリア国際主義をつらぬき、プロレタリアの階級形成を国際主義につらぬかれた活動によっておし進めるのである。第四は、党は階級的な闘争が経過するさまざまな発展段階においてつねに運動全体を代表する存在であり、そのように活動するということである。共産主義者の活動はつねに階級闘争の発展段階に対応して、その段階でのプロレタリア全体の利益を代表する活動であるべきである。そうでない活動、たとえば革命の結果を「型論」として当てはめたり、主観的な革命の戦術を急進主義的に提起する左翼共産主義、また逆に、階級情勢とは無関係な右翼的活動に埋没する部分

は批判されねばならない。革命的労働者党は、プロレタリ

アの一部の運動に一面的にのめり込んで活動の内容を設定してしまうのではなく、つねに現実のプロレタリア全体の利益を実現するために努力する。

2 レーニン・ホルシエビキ党の組織原則

二一世紀のプロレタリア革命をめざす私たちが、革命的労働者党をつくりだしていくうえにおいて重要な課題は、レーニンの革命党組織・組織論への反発・全面否定の傾向と対決し、あくまでもレーニン組織論の精神を現代的に継承していくことである。中央集権主義をかかげるレーニンの党組織論を、命令の体系―指令の体系の党組織というスターリンの組織論と同一視し、レーニン組織論を清算しようとする動きとはたかわねばならない。そして、スターリン主義組織論を乗り越える革命的労働者党の組織論を、私たち自身が主体的につくりだしていかなばならない。それはあくまでも革命党・労働者党としての私たちの組織的実践においてはじめて可能である。マルクスやレーニンの組織論を踏まえて、現代の私たちが党の運営、組織的団結―規律の規定内容、組織の原則をみずからつくり

だしていくという決意が重要である。

スターリン主義組織に対する反発・告発というレベルでは、党組織の現代的な中身は決して創造できない。「個人の自由」から出発し、スターリン主義組織を抑圧の体系ととらえて、組織を個人の自由な連合のもとに解体しようとするネットワーク型組織論、あるいは「イストの主体性」と「思想的同一化」から出発してスターリン主義組織論を批判し、階級形成の活動と組織としての結束を無関係に分離する宗派的組織論、このような二つの反スターリン主義の安易な傾向と対決して革命的労働者党を建設していくのがわがブントの党建設の道である。さらに、私たちブントが党建設を語る場合、綱領や戦術の内容については強い関心をもったとしても、組織それ自身の団結、規律、規約の内容をつくりあげていくことには積極的でないという歴史的限界をしっかりと見つけ直すことが重要である。組織の維持・強化の原則を軽視する過去のブントのあり方を根本的に反省していく姿勢が私たちには不可欠である。

3 革命党建設の組織原則

私たちはレーニン・ボリシエビキ党建設に学び、次のような組織論・組織原則に立って革命党建設をおし進めていく。

第一は、あくまでも、帝国主義国家権力―政治警察とのたたかいを前提として組織をつくりだしていかなければならないという原則である。レーニンは政治警察との闘争や、弾圧・組織破壊にうちかつ組織建設・革命党建設をぬきにして労働者階級の解放は決して実現できないということを強調している。私たちの現在の党建設は現在の政治的自由をふまえたものでなくてはならないにしても、しかし、あくまで革命党としてその組織論のうちには政治警察とたたかひぬくことのできる組織原則が貫徹されていなければならない。

第二は、労働者階級の現実的な解放運動をおし進める組織として革命党はつくりなければならないという原則である。思想サークル・綱領サークルなど、労働者階級の解放運動とは無関係に組織一般は存在することができない。革命党建設にとって重要な問題は、労働者階級の内部での活動がみずからの生死に関わって

いるということにある。その活動は、たんなる運動の推進に終始・埋没するものであってはならない。「現在の利益のための活動」「未来の利益のための活動」とマルクスが提起した「三重の活動」の内容をレーニンは「計画としての戦術」というかたちでおさえながら、全国党による統一した路線の実現、そのための党活動としてまとめていった。共産主義者は階級の現実の運動内部にあったとしても、つねに革命党の綱領・路線にもとづき活動することが基本なのである。この点をふまえて、党は労働者階級の解放をどこまでもおし進める組織であるということが、党の組織原則に明示されなければならない。

第三は、革命党・労働者党とは、党の特定の組織に所属する党員によって成立させなければならないといふ、いわゆる「規約第一条」に関わる組織原則である。この原則は、政治警察とたたかい、階級闘争を指導し、組織活動を展開して団結をつくりだしていく党組織に「いかに、いかに」とも基礎的な原則である。実際、党員が組織に所属して活動を行なうのでないかぎり、組織としての内容確認はできない。また組織に所属し、政治

警察との闘争、綱領の物質化、路線の貫徹を通じてこそ、同志的な信頼関係を形成していくことも可能となる。ある特定の党組織に所属することを党員資格の条件とするかどうかという点は、かつてレーニンとマルトフらとの組織の分裂をかけた組織原則上の決定的対立であった。これは現代の革命的労働者党建設にとっても非常に重要な原則である。組織への所属―組織としての実践という原則を確立しつつ、私たちは組織構成員の実際上の「所属と実践」を通じた党づくりをねばり強く追求していかなければならない。

第四は中央集権制の組織原則である。この原則を中身において確立していくことである。ここにおいては次の点を確認しておく必要がある。まず、統一された国家権力の攻撃に対しては、全国で統一した戦術をもって反撃していかなければならないということである。個々分散的な反撃では個別撃破されるのは必然である。国家権力の統一性に対して、革命党は全国の党組織を有効にたたね、計画的に反撃に向かわせねばならない。それは当然にも全国的な指導部・指導組織を中心にして党全体が展開していくことを意味して

いる。政府の攻撃に革命党として総路線を対置し、これを實現する指導部体制—全国体制を確立することが中央集権制を實現していくということである。

この中央集権制を指導部からの命令と執行の体系・体制とみなすスターリン主義型の組織論（ベルト型組織論）が存在するが、これは誤りである。このような考えに対してレーニンは、「指導の中央集権」と「責任の地方分散」を組織の原則として提起している。中央指導部は綱領・路線の強化・発展に責任をもち、全体を見渡しながら党の路線総体の實現に対して責任を負う。この意味で党の指導は中央集権的な性格をもつ。他方、党の綱領・路線にもとづいて、階級闘争の日常的な指導を行なうのは各地方委員会である。実状にあつた細やかな指導や点検の権限と責任は中央ではなく、地方組織や各級機関がもつべきである。執行体制における地方組織や機関の独立性・自立性が、レーニンの組織論においては「責任の分散」として位置づけられている。私たちの党においては、ネットワーク型組織論にもとづく一般的な地方分権ではなく、ボルシエビキ党型の「指導の中央集権と責任の地方分散」の

原則が實現されていくべきである。

第五は、政治警察との闘争によって制限されるものではあつても、「できるだけの公開性と選挙制」の原則を軸にして民主主義的党運営をはかるという党内民主主義の組織原則である。党大会を最高の決定機関として、そこで綱領・路線を採択し、指導部を選出するという民主的原則がならぬかねばならない。単一の意志の決定、その執行体制の確立という党の最重要事項の確定は、党大会で公明正大におこなわれなければならない。党の指導部は党大会の定期的開催に責任をもつ。大会の遅延は組織原則の後退を意味する。

公開性の原則とは、党の主要な活動の総括がつねに党の内部に公開され討議されていなければならないことを意味する。ある一部のセクションで活動内容が独占され、隠ぺいされてはならない。また綱領・路線をめぐる組織内の論争も党内に公開されねばならない。選挙制の原則とは、大会や中央委員会が指導部を黨員の自由な意志によって選出していくことであり、ここでは一切の不正をなくした選挙を實現していくということである。公開性や選挙制は決して党を弱めるもの

ではない。これにより組織成員の党への主体的参加がより促進され、組織の団結と同志間の信頼をより強めることができる。

1. 黨員の権利が重視されねばならない。黨員は党大会に参加する権利をもち、党内の討論・論争に参加し、意見を言うことができる。指導部と異なる見解をもつ場合、それを最人、党大会において意見書を提出することができるし、機関紙や党内通達に指導部の見解に対する批判を含む見解を掲載することもある。あくまで黨員は、綱領・路線に対する意見を広く党全体に示す権利を持つのである。

しかし党は、反対派が分派として固定的・恒常的に、あるいは特定の人脈・地縁にもとづいて形成されることを容認するものではない。恒常的ではない流動性をもち、反対派は党内につねに形成されるが、これは党の民主主義的原則の貫徹によって、党そのものに包摂されていく。

第六は、組織的結束・団結を實現し強化していくための「同志的信頼関係の形成」という原則である。規約にもとづく組織の民主主義的運営と同時に、同盟員

各自の主体的参加と献身的な組織活動こそが、その「同志的信頼関係」を創造するのである。具体的には規約前文において、「同盟員は革命に向けた困難な党生活のなかにおいて相互に助け合い、同志的な連帯と批判を行ない、同盟を共に前進させていかなければならない」とした内容である。そして同時に、現在の革命党の「同志的信頼関係」の形成においては、権力からの組織の防衛を意識的にやりぬくことを重要点としつつも、労働者階級の内部において党の路線を實現し、階級内部で影響力を拡大していくことが重視されるべきである。党の路線を階級闘争のなかに實現していく黨員の活動のねばり強さ、その成果・経験の蓄積のうち、まさに「同志的信頼関係」はもつともよく形成されていくのだ。

私たちはブントとして、現代における革命的労働者党の建設をめざし、ボルシエビキ的組織原則をしっかりと確立してたたかひぬ。

4 革命党の階級指導論

『共産党宣言』では共産主義者の活動に関して、

「プロレタリア階級への形成、ブルジョア支配の転覆、支配階級としての組織化」と並んで、共産主義者の活動が「当面する利益の実現」と同時に「未来の利益の実現」のためであると規定されている。共産主義者はプロレタリアートの「直接的利益のためにたたかう」が、同時にプロレタリアートの「未来の利益を代表する」という「二重の内容において活動するのである。

この内容は、マルクスが『党宣言』および『哲学の貧困』において提起したプロレタリアの団結論（存在論としてもある）をふまえた階級に対する革命的労働党の指導のあり方を規定しているのである。すなわちプロレタリアは直接の利益を実現するために団結し、このたたかひのくり返しの中で「資本に対する労働者」から「労働者に対する労働者」という立場をつかみとって新たな団結を生み出していく。プロレタリアは「直接的な団結」から「恒常的な団結」へ自分たちの団結を発展させていく。だが、この団結は革命が実現するまでは常に資本家の攻撃および自分たち自身の利害の対立によって不断に崩壊する。階級形成の過程はこのくり返しであり、団結と再団結の永続的な展開な

のである。労働者党はこの団結の発展の推進者として「恒常的な団結」をより自覚的に形成できるように労働者の内部において活動する。革命的労働者党の階級指導とは、このプロレタリアの団結と再団結の過程の総体を意識的・積極的に推進するものである。私たちはここをふまえずなくてはならない。

またレーニンは党による労働者階級への階級指導の重要性をマルクスとは別の角度から提起している。すなわち彼の『左翼共産主義批判』においては、党の規律の根拠について説明するといふかたちで、党が労働者階級・大衆と交通形態を確立していくために、階級・大衆に接近し溶け合う能力を獲得していかないかぎり、党の指導はできないし、また歴史的にもその党は敗北・消滅していく以外にはないことを明示した。労働者階級の現実の要求、現実の団結とその発展について常に労働者党の全力をあげて考察し、運動を推進していくこと、このようにレーニンの階級指導の内容はマルクスと同一の場面においてもあると理解できる。

また、レーニンの『なにをなすべきか』の階級指導

に關しては、政治闘争や其所以的意識の重要性を確證するといふ点において重要な意味をもつが、これが経済闘争や社会的課題の闘争について意味がない、より低いものではないという内容において理解される。あるならばそれは誤りである。労働者階級は政治的・社会的・経済的領域のすべてにおいて階級形成される。また革命的労働者党はそのようにしていかねばならないのである。

規
約

規約

前文

わが同盟は、第一インターナショナル、第三インターナショナルの規約の前文に明記された「労働者階級の解放は、労働者階級自身の手でたたかいとられなければならない」の精神に立脚し、資本主義的生産様式の止揚、すなわち一切の階級支配ならびに階級そのものを廃止し、資本主義的生産様式に基づく全ての差別と抑圧の廃絶、世界社会主義社会―世界共産主義社会の実現を終局目標とする。

この目的の実現のために、帝国主義国、植民地・従属国、「労働者国家」における現代世界の階級闘争を結合させ、世界革命の一環としての日本プロレタリア革命の勝利のためにたたかう。

われわれの当面の任務は、労働者人民を階級に形成することであり、国際主義にかけて差別・排外主義とたたかい、たたかうアジア人民に連帯して、日本帝国主義を打倒すること、すなわち天皇制と日米安保を支柱とする日本におけるブルジョア支配を転覆することであり、民族自決権の承認を原則として掲げたプロレタリア独裁―ソビエト共和国を樹立することである。

このためわが同盟は、第一次共産主義者同盟以来の歴史を継承し、スターリン主義及びあらゆる類の社会民主主義指導部から自らを明確に区別し、それらとの非妥協的闘争をおとして、プロレタリア民主主義に基づく中央集権的な新たな革命的労働者党を結成し、新しいインターナショナルを全世界に組織するために努力する。

同盟員は同盟の一定の組織に所属し、政治警察とたたかい、綱領の物質化、路線の貫徹を通して同志的信頼関係を形成し、不断に同盟の団結を強化していかな

るべきである。また同盟員は革命に向けた困難な党生活のなかにおい、相互に助け合い、同志的な連帯と批判を行ない、同盟を共に前進させていかなければならない。

第 章 同盟員

第 条 同盟の綱領と規約を認め、同盟の一定の組織に加わって活動し、規定の同盟費を納入するものは同盟員となることができる。

(第二条) 同盟への加入は、二名の同盟員の推薦により、一年間の候補期間を経て、所属細胞が決定し、上級機関の承認を得て確認する。

(第三条) 同盟員及び候補の義務は次のとおりである。

(イ) 会議への参加と同盟の決定の実践。

(ロ) 同盟員の獲得と機関紙・誌の購読と拡大。

(ハ) 規定の同盟費の納入。

(ニ) 同盟の目的に合致した生活様式と行動。

(ホ) マルクス・レーニン主義に基づく共産主義理論の学習と研究。

(ヘ) 同盟の機密の保持。

(ト) 同盟以外に関係している一切の組織・団体に関する詳細な報告。

(第四条) 同盟員の権利は次のとおりである。

(イ) 同盟各機関に対する所定の選挙権及び被選挙権。

(ロ) 同盟の会議・刊行物での自由な討論

(ハ) 上級機関への反対意見の提出。

第二章 同盟の組織と機関

(第五条) 細胞は、同盟の基礎組織であって、三名以上の同盟員で構成する。原則としては、工場・経営・居住・街頭・学園などに組織する。

(第六条) 同盟の基本組織構造は、「細胞」―「地区委員会」―「都道府県委員会」―「地方委員会」―「中央委員会」―「大会」である。

(第七条) 大会は最高決定機関であり、三年に一回開催し、中央委員会又は三分の一以上の地方委員会の要求によっても召集される。大会は、中央委員及び代議員によって構成され次のことを行なう。

(イ) 中央委員会の報告の審議と賛否の決定。

(ロ) 綱領と規約の決定及び改正。

(ハ) 中央委員の選出。

(ニ) その他中央委員会が請求する事項。

(第八条) 中央委員会は、大会の決定に基づき、大会から大会までの期間、同盟の指導を行なう。

(第九条) 中央委員会は、年一回以上政治局が召集し、又は三分の一以上の中央委員の要求によって開催され、次のことを行なう。

(イ) 政治局報告の審議と賛否の決定。

(ロ) 議長並びに政治局員、統制委員の選出と解任。

(ハ) 同盟組織と各級機関の創設・改廃の決定。

(ニ) その他、規約が定め政治局が請求する事。

(第十条) 政治局は次のことを行なう。

(イ) 政治局は、中央委員会の方針にしたがい具体的に日常的に同盟の指導を行なう。

(ロ) そのために中央労働運動指導委員会、中央学生組織委員会、および被抑圧人民の各解放委員会を組織する。

(第十一条) 政治局は、書記局、編集局、国際部など

の専門部局を常設することができる。

(第十二条) 統制委員会は、規約の第三章が守られているかどうか審査する。処分公正さを守るために、処分を決定する細胞、各級委員会、及び被処分者と討議し、内容を中央委員会に報告する。

(第十三条) 同盟の各地方組織は、中央委員会の決定に基づき、各地方の実情に応じ、指導機関を設置する。

各地方組織は、中央委員会と政治局の決定に異義がある場合は再審議を求められることができる。

(第十四条) 同盟外組織の被選挙機関に二名以上の同盟員がいる場合、各級指導機関の下にグループをつくり責任者を選出する。

(第十五条) 大衆運動を組織するために、指導機関の下に基本系列を越えてフラクションを設置する場合はある。

(第十六条) 同盟のすべての会議は、全体の過半数の出席をもって成立し、出席者の過半数以上の賛否で議決される。

第四章 同盟の規律

(第十七条) 第二条の同盟員の義務を守らず、同盟員の権利をおかし、或いは、階級的利害を裏切り、同盟に多大な損害を与える行為をなすものは、最高除名にいたる処分をうける。

(第十八条) 正当な理由なく三ヶ月続けて同盟活動を放棄し、同盟費の納入を怠る者は、権利停止を通告される。さらに続けて半年間活動を放棄した者は離党勧告を受ける。

(第十九条) 同盟員に対する処分は、その同盟員の所属する細胞が各級指導機関の承認をへて決定し、統制委員会の報告の上で中央委員会の確認をうけなければならぬ。

(第二十条) 中央委員の処分は、中央委員会の決定をへて、大会で承認されなければならない。

(第二十一条) 処分をうけた同盟員は、大会にいたるまでの各級機関に異義申請を行なうことができる。

第四章 同盟の財政

(第二十二条) 同盟の財政は、同盟費を基礎とし、寄付等をもってまかなう。

第五章 その他

(第二十三条) この規約に定められていない問題については、中央委員会が規約の精神に基づいて処理する。中央委員会は、このために細則をつくることができる。ただし、細則は大会で確認されなければならない。

労働者人民のたたかいの指針

共産主義者同盟(統一委員会)
政治機関紙

戦旗

を読もう

定価一部200円

年間購読料(24回/送料共)

開封6,240円 密封6,960円

[申込先]戦旗社

戦争と大失業の時代に反撃し
世界のたたかう人民と連帯し
共産主義を共に切り拓こう

発行 戦旗社

東京都足立区綾瀬7-2-11

電話 03-5697-7541

郵便振替 00180-4-176133

定価 一部五百円